**説教20230115エレミヤ3：21-4：2マルコ1：14-20「私のもとに立ち帰れ」**

**「裸の山々に声が聞こえる　イスラエルの子らの嘆き訴える声が。」イスラエルの子らは、バビロン捕囚を前にして、この様に、嘆き悲しみ泣きながら、父なる神に祈っていました。裸の山々という表現からは、当時のエルサレムの国から多くの物事が奪い去られ、まことに寂しい、荒れ果てた国の状況が想わされます。又、人々の連帯や友情も愛情も奪い去られ、人々は孤立し傷つけあっているさまが思われます。**

**松尾芭蕉は江戸時代に平泉を旅した時に、「国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて時の移るまで涙を落としはべりぬ。」と述懐しました。如何に人間が愚かな戦争を繰り返し、国が破綻し、人民が嘆き悲しんだとしても、そんな人間の営みには関係なく、自然の力によって又、青草が大地に生い茂って、人間を養い、新しい春の幸せをもたらしてくれると言った、一種の自然信仰がこの芭蕉の述懐には息づいている様です。一方で、聖書に出て来る、裸の山々という表現は、見た目に山々がはげ山になったという変化を言い表しているというよりは、見えることでも又見えないところでも、国から豊かさが奪い去られて、嘆き悲しみ泣かざるを得ない日々を迎えてしまった国の有様をいいあらわしているようです。**

**ここで、現代社会に生きる私たちのメンタリティーと比較してみますと、私たちは、果たして、江戸時代の芭蕉が述懐したようないわば素朴な自然信仰に戻ることが出来るのでしょうか。**

**「国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて時の移るまで涙を落としはべりぬ。」**

**先週、竹田市にある岡城址まで車を走らせて、早くも青い芽吹きを感じさせる山河を見てきました。確かに、城春にして草あおみたりという風景もありましたけれども、笠うち敷きて時の移るまで涙を落としはべっていた人々を見ることはありませんでした。果たして今の時代に生きる私たちは、もはや、この江戸時代の人の様に、豊かな自然によって、人間が立ち直らされ、癒され、喜びに満たされるようになるという物語を、あまり信じられなくなっているのではないでしょうか。**

**今の世界は良くも悪くも一つとなっています。ウクライナでの戦争はその地域だけのローカルな事情によって引き起こされたのではなく、日本も含めた世界各国の関係性の内に生み出されている悲しい出来事です。ですから大分の山河で暮らす私たちにとっても、ウクライナでの出来事は切り離して考えることは出来ないのです。ウクライナでの悲しい出来事を、今ここにいる私たちが悲しむのは、そのように一体化された世界に身を置く者たちとしてなのです。今の地球では、全地にわたって大きな悲しみが覆いかぶさっているような状況です。その悲しみに直面させられている、今の時代では、芽吹いて来る自然の生命力ぐらいでは、いまいち私たちは癒されることがないということかも知れません。**

**聖書が説く、癒しと慈しみは、ただ一人主イエスキリストに立ち帰り、彼について行くことによってのみもたらされます。今日の説教題の「私のもとに立ち帰れ」の私という主語が大変重要です。私とは主イエスキリストのことです。それ以外の誰でもありません。それは、実の父でも、母でも、最愛の配偶者でも、牧師でも、又、偉大な指導者でもありません。これは言うまでもない当たり前のことですが、私たち人間はつい、こういった人々を知らないうちに偶像崇拝してしまうものです。或いは、偉大な自然の力を象徴しているような、滝や、大木や、木で彫った造形物などを偶像崇拝することもあるかも知れません。**

**悲しむ人々は、幸いである、とイエス様は言われました。なぜならば、その人々はイエス様によって慰められるからです。このことは、他ならぬイエス様ご自身が言われてることなのでほんとうのことです。**

**冒頭で語りました、裸の山々で嘆き訴える声を上げている者の姿は、今のこの日本にいる私たちの姿でもあるのではないでしょうか。しかし私たちは、嘆き悲しむことはあっても、決して絶望することはありません。今ここに、「悲しむ人々は、幸いである」と言われるイエス様がおられるからです。むしろ、今の私たちは、イエス様がガリラヤで神の福音を宣教され始めた時代と同じように、まことに立ち帰り、ついて行くべきただ一人の救い主イエスキリストに出会うことが出来る格好の時代に差し掛かっているのです。イエス様は言われます。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と。時は満ち、と言うのは、その時が来た、それが実現するに格好の時が来た。という意味です。将に今この時が、その時であります。**

**今、この世の中で祈る人が増えているように思います。国破れて山河在りというに相応しいような、様々な物事が奪い去られている現代の社会にあって、人の力を超えた何らかの力に寄り頼みたい、委ねていきたいという人達が増えつつあると感じます。そんな中で、私は、一抹の不安を感じています。こういった時代には、様々な宗教が盛んになるかも知れません。人々が偶像崇拝を盛んにし始めるという展開も考えられないわけではありません。人々が丘の祭りや山々での騒ぎに心奪われて、偽りの信仰を持たされるということがないように、私たちは主に祈って参りましょう。**

**私たちクリスチャンが祈りの形を持っていることは実に幸いなことです。それはイエス様が教えて下さった主の祈りに見られるように、「天にいます父なる神よ、斯く斯くしかじかのことを行って下さい。イエスキリストのお名前によって祈ります。」という定まった形をとっています。私たちは、このようにイエス様と共に、天にいます父なる神に向かってお祈りを捧げるのです。この基本から外れてしまわないように、私たちは、日々悔い改めて、主イエスに立ち帰っていきます。このイエスキリストという固有名詞が大事なのです。**

**湖で網を打っている漁師たちが、イエス様から「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」という言葉をかけられて、彼について行ったのは、決してその言葉で真理を悟ったからとか、何かを理解したからという訳ではないでしょう。ただその場にやって来たイエスキリストの姿とその言葉に、訳も分からないうちに促されて、気が付いたらイエスの後について行ったというのが実情なのではないでしょうか。普通に考えましても、私たちがイエス様以外の人から、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」といったような意味が分からないことを突然言われたとしても、決してついてはいかないことでしょう。**

**幸せを願う人たちの一つのわかり易いたとえとして、白馬に載った王子様がいつか迎えに来てくれるとか、玉の輿に乗る、といった言い回しがあります。現状から申しまして、前者のたとえは夢物語として一笑に付される恐れがありますが、後者のほうは、あわよくば現実化できそうな将来の夢として現実味を帯びる物語であります。こういった事例を聖書と比較するのもおこがましいですが、１点だけ検討したいと思います。**

**白馬に載った王子様や玉の輿と、イエス様に共通するところが一つあります。それは、彼らが、私の処にやって来て、ついて来なさいと言って、彼について行けば、今の場所から、比べ物にならないほど豊かで幸せな場所へと連れて行ってくれるという信仰です。**

**しかしながら、王子さまや玉の輿は決して、私に向かって「立ち帰れ」とは言わないことでしょう。この点が、イエス様と彼らとが根本的に違うところです。イエス様は「わたしに立ち帰れ」と言われるのです。「立ち帰れ」という言葉は「悔い改めなさい」とも言い換えられます。立ち帰るとは、私たち人間が罪によって間違った不幸な方向を向いているのを、正しく幸せな方向である、イエスキリストのほうへと向き直らせて、方向を見定めるということです。罪多き私たちはこの「立ち帰り」を毎日、或いはいつもいつも行っていかざるを得ないのです。**

**それに比べて、王子さまや玉の輿のお招きは、こんなにしつこくはないのです。それはただ一回ぽっきりのチャンスであることも少なくないでしょう。**

**イエス様の憐れみと慈しみは勿論、私たちを格別の幸せと喜びとで包んでくれることではありますけれども、それだけはありません。イエス様は何度も何度も、決してあきらめることなく私の前に現れて下さいます。そして私の罪深い姿、醜い姿を全てご覧になって、その上で、決してダメだしすることなく、「私に立ち帰り、悔い改めなさい。そして私について来なさい」と言って招いて下さるのです。私たちはイエス様をお迎えするからと言って、自分自身をチャーミングに厚化粧してお待ちする必要はないのです。それよりは罪があるありのままの自分の姿を、イエス様に対してあらわにする方がむしろ望ましいのです。**

**使徒言行録３章19節**

**だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。**

**イエス様に悔い改めて立ち帰る時、私たちが抱えている自分の罪は、雪よりも白く清められ消し去られます。ではなぜイエス様はそんなことが出来るお方なのでしょうか。それは、イエス様が私たち人間の抱える罪を全て知りながら、その私たちの罪の故に、十字架にかけられて、死なれた方だからです。それから、その私たちの罪を消し去るために、復活されて、私たちと親しく歩んで下さる方になられたからです。**

**私たちは、この世にあって罪ということを決して軽く見てはいけません。この世の犯罪にはならないような、妬みや嘲りの念も、一度その方向に向かえば、だんだんと積もり積もって大変なことになってしまいます。聖書に書かれてある罪は、積もり積もる性質があります。ですから私たちは常にイエス様と共に歩んで、自らの一挙手一投足をイエス様に見てもらってチェックしてもらった方が幸いなのです。**

**救いの御子イエスキリストは、いつもいつも私たちのもとへと、あきらめることなく訪れて下さる王子様であります。その方から離れることがないように、今日も私たちは御言葉に聞き従って参りたいと願います。**

**お祈りします**

**父なる神よ**

**あなたが送って下さった御子イエスは、いつもいつも私たちのそばにいて、私たちの行いを見守り、罪がない正しい方向へと立ち帰らせて下さいます。その大いなる恵みに感謝し、あなたをほめたたえます。私たちが、罪のほうへ向かわないように、どうか、いつもいつもあなたと共に歩ませて下さい。**

**また、今の世界は、全ての出来事が関係しあって、一つの世界となっています。その世界の中心にあなたがおられますから、どうか全ての出来事、、コロナ渦、ウクライナなどにおける戦争を統治し、全てを益となるように用い、この世界を平和な世界へと導いて下さい。未だ、あなたのことを知らない隣人たちに、あなたの慈しみと憐れみを伝えていくことが出来ますように。**

**父と聖霊と共に**